令和６年度　第２回接続期教育研修
「幼児教育と小学校教育をつなぐ幼保小連携の在り方」
～「やってみたい」から始まる学びの芽～
日時：令和７年１月２８日（火）１５：００～１６：３０
会場：足立区役所　庁舎ホール
講師：國學院大學　人間開発学部　子ども支援学科
教授　　吉永　安里　氏

実践事例発表がありました

区立竹の塚小学校　１学年　　「やってみたい」から自分の生活を楽しく豊かに！

4、5月、校庭で春探しから花を育てたいという思いが表れる。（植木鉢・・・朝顔・花壇・・・ひまわり）
子どもたちは、園での経験から種をまいて水をあげることで育つことを知っており、経験から育てることに自信をもって行動しようとする姿が見られている。

自分で活動（植物に働きかける方法）を決める

①毎日よく見たい　お世話したい
・つるが伸びて倒れてしまった。立てる棒があるといいな。先生に言おう。
・ソフトクリームみたいなつぼみになると咲くよ。

②6年生に相談する機会をもつ
「葉っぱを虫から守るためにはどうしたらいいの？」など、自分ではわからないことを6年生との関わり合いの中で知ることができた。

③花を残す方法を自分で決める
・色水を作って遊びたい。
・採った種をまいてまた育てたい。
・まだ花が咲いているからお世話を続けたい。

④生活科アルバムの作成
保育ドキュメンテーションを参考に、これまでの学びを振り返る。

担任の関わり（主体性を引き出す環境づくり）

・「あさがおニュース」で共有する。
・自分でカードを選び気付いたことを整理しながら表現する。
・朝顔への手紙を書く、賞状を作る活動など、振り返る機会をもつ。

担任より

「やってみたい」から始まる学びは、自分の思いや願いを叶えたいからこそ、その思いや願いが膨らみ続ける。主体性を引き出す環境を設定することで、自分の生活を楽しく豊かにしていくことがわかった。経験の違いや多様性を生かすには、就学前施設との接続の必要性が更にあることも感じた。

区立中島根保育園　5歳児めろん組　　「やってみたい」から始まる　学びの芽

～やってみたいの始まり～
夏野菜を育てる中で野菜に関する図鑑を置いておくと、図鑑に興味をもった子がグリーンカーテンの葉と似たような葉の写真を見つけた。その葉が「ゴーヤの葉」であること、「葉でお茶が作れる」ことを知る。

子どもの姿

①グリーンカーテンの植物は何だろう。図鑑で調べてみると、ゴーヤと判明。お茶にして飲めることを知る。
②お茶作りがきっかけとなり、やってみたいがあふれている。グリーンカーテンのへちまにも興味を膨らませている。
➡「食べてみたい」ことを園長先生に相談。
③図鑑に「へちまのたわしの作り方」が載っていることを発見。
④ゴーヤのお茶作りから、へちまでもお茶を作りたいと思いが見られている。

やってみたいの実現

①葉を乾燥させて、お湯を入れて飲んでみよう。
➡まずは園長先生が試飲。どんな顔になるかな。表情をよく見ていた。興味をもった子も試飲する。
②へちまを採ってみたい。
➡触る・においを嗅ぐ・中を見たい
図鑑で調べると、食べられることが分かる。
食べてみたい。
➡「美味しい」「ちょっと苦手」「もっと食べたい」

・ひとりの「やってみたい」が、みんなの「やってみたい」に変わる。
・ゴーヤのお茶作りの経験を活かしてお茶作り。その後サツマイモの葉でもお茶作りをやってみる。

担任より

知りたいと思ったものへの関わり方・意欲は「主体性・積極性・興味の持続・思考力・集中力・表現力・判断力」など様々な点が見られ、遊びの中には好奇心から始まる学びがたくさんあると感じた。
遊びを見守り、見取り、学びのつながりや環境構成を一緒に考えながら保育することを大切にしている。

私立くりはら愛育保育園　5歳児たいよう組　「やってみたい」が生まれる環境とは

～素材・廃材遊びを通して～

・子どもたちが遊びに入りやすいように身近な素材を用意する（段ボール、紙コップ、新聞紙、牛乳パックなど）。
・素材から何かを作ることを目的とせず、素材そのものに十分に触れ、「五感」を楽しめる環境構成を行う。

子どもの姿

・素材と自分の動きを楽しんでいる。
・イメージが膨らみ、物作りへの発想が生まれている。
・興味は示さないが、友達の姿を見て真似て遊んでいる。
・素材と向き合い、他の素材と組み合わせて遊びが広がっている。
・段ボール遊びを室内だけでなく園庭に変えてみることで、組み立て方、子どもの動き、ごっこ遊びが変わっていく。

⬇ やってみたいが生まれる

「こんなことをやってみたい」と発想が生まれ、夏祭りごっこ遊びへとつながる。

・日々の保育で様々な素材と出合い、自分の世界を自由に楽しめるようになった。
・発想が豊かになり、表現することの過程を楽しんでいる自分の世界と、友達との世界が混じり合い、共感し合ったり意見を伝え合う時間を過ごしている。
・素材と向き合い試行錯誤する場だけではなく、自分のイメージを表現したり、友達と伝え合い、触れ合いながら協力して作り上げていく時間を過ごすことが、主体的な活動のきっかけになった。

担任より

講　評　　國學院大學 人間開発学部子ども支援学科 教授　吉永 安里 氏

≪区立竹の塚小学校≫

①子どもの思い・願いを引き出し、生かす工夫
「環境構成の見通し＋教師の援助」
➡・学びに適した環境の工夫や向き合う時間が十分に保障がされている。
・子どもの思いや願いを発揮できる授業。柔軟なカリキュラムになっている。
・単元の終わり方が重要である。活動や直接的体験を通して、生活の中で思いを大切にしていくことが大事である。

②子どもの経験を生かす、耕す工夫
「自然に対しては興味があるものの、花や草を見て楽しんだり、遊んだりする経験があまりない児童もいた」
➡・幼児教育での経験の重要性・見直しが必要。
・経験したことを自信をもって発揮できると良い。

③子どもの学びの見取りと評価に工夫
「ドキュメンテーションの活用」
➡子どもたちがどんな経験をしてきたのか、子どもが自分で学びを振り返ることで、子ども同士で経験の共有がもて、その時の思いを伝え合うことができる。

≪私立くりはら愛育保育園・区立中島根保育園≫

①興味を耕し、引き出す工夫
・やりたい、やってみたいを言い出すまでが大事。理解に基づいた環境をつくる。保育者も援助しながら共主体の関係で関わっていく。

②子どもの経験を引き出す、つなげる工夫
・一人の興味をみんなの興味につなげていくことが大事。クラスの学びになっていく。（主体的な学び）

③子どもの試行錯誤を促し、支える工夫
・支え、一緒に面白がる。子どもの言葉から遊びを広げたり、捉えたりする。
・「やってみたら面白かった」の経験を繰り返していくことで学びにつながる。

実践の場で大事なこと

≪幼保小をつなぐ環境構成と関わり≫

・物的環境（もの、空間、時間）
・人的環境（大人の関わり）
・個の興味、関心を活かした活動展開
・個の遊びや学びが共有され、広がる環境設定や活動
・個に応じた学び、協働的な学びなど

研修生の報告書より

植物の栽培など、幼児期に経験したことが、小学校の学習でより深い学びとして経験できることは、子ども達にとって、点と点が繋がっていくようだと感じた。幼児期の経験が、小学校の学習ではどこにつながるのかを意識して保育をすることも重要だと思った。

一人の興味をみんなの興味につなげていくことで、クラスみんなの興味にしていくことや、やってみたら面白かった、と感じる経験が大事である。その先子ども自身が試行錯誤するのを促し支えていく保育者の援助も大切だとわかった。保育者が学びに向かう力となるような環境構成をすることが、子どもの主体性を育むということだと改めて感じた。

実践事例を聞いて、保育の現場では幼児の「やってみたい」から始まる様々な気付きや学びが繰り広げられていること、それを多かれ少なかれ経験して入学していることに改めて気付いた。学校では1年生は初めてのことが多いイメージで教えがちだが、児童の今までの経験からの気付きや思考をもっと深めていけたらと思った。